



## 越野 緑さん

(大津市立やまびこ総合支援センター内知的障害児者地域生活支援センター 相談支援専門員)

東京都生まれ。小学校高学年の頃からひとり暮らしに憧れていたという越野さん。中高生時代は映画やお芝居、舞踏を観ることが好きで、園子温監督に電話をかけ、ポスター貼りのお手伝いをされたことも。ホームレス段ボール村のあった新宿の地下街や、ゴールデン街の雰囲気も好きだったそうです。また、「別の世界を見てみたい」との思いから、「非日常というか、異世界に外国旅行に行くような感じで」老人ホームにも通っておられたそうです。

大学では「ひとはなぜ生きるのか、なぜ死ぬのかを知らない」と、どんな仕事にも就けないだろう」との思いから、哲学を専攻されます。その大学でのサークル活動(粘土サークル)で知的障害のあるひとたちが入所されている施設に通うようになり、彼・彼女らの表現に魅力を感じていきます。

大学卒業後は大学院に進学され、障害児教育を専攻、休み期間中に偶然訪れたびわこ学園(①)に縁あって就職されました。ヘルパー、デイサービスの職員を二年経験され

その後、平成一四年から一八年まで身体障害者の相談支援業務を経て、平成一八年からやまびこ総合支援センター(②)の相談支援業務に従事。現在は、大津市障害者虐待防止センターの担当をされています。

### 金と男とイクラのパジャマ

齋藤 越野さんが、この福祉の仕事を選ばれた理由というのは……。

越野 なんかねえ。ドロドロってした感じの世界観がただ好きだっただけなんですよね。としか思い浮かばないんですよ、きれいなエピソードを思い起こそうと思ったんだけど、全然思い起こせなくて(笑)……。何のために仕事してるかって言ったら、金と男しか思い浮かばなかったんですよ。でも、金と男のためだったら別のところに行ってもいいのに、この仕事を続けてるってことは何かなあと思ったら、おもしろいからって。イクラのパジャマ(③)しか思い浮かばなかったんですよ。

齋藤 金と男、男でこの職場ですか。  
越野 男性が多いとかそういうことじゃなくって、もてたい、ええ仕事してもてたいとか……。

齋藤 福祉、もてるんですか。

越野 いや福祉がというより、なんかいいねえ越野さんみたいな、そういう(笑)……。それしかないんですよ、動機がやっぱり……。そんななんか、世のため人のためと思えてなくて、なんか自分が楽しくやらせてもらって、結果的にそれで何かができてたらラッキーぐらいで……。しなくてね、すいません。

齋藤 いえいえ。イクラのパジャマとはどこで……

越野 イクラのパジャマは、アメニティー・フォーラム(④)です。

齋藤 ああ、そうか。

越野 はい。でも、可哀想に思って。彼が好きなパジャマなのにこんなところに取り上げてって思ってる。

齋藤 ひどいことしよる、と。

越野 ほんまに思いましたよ。非日常とかいうのは失礼ですけどね。わざわざ非日常しようと思って、彼らは作ってる訳じゃないから。それが日常のひとつとしてみれば「何言ってるの?!」って、外国から旅行者が土足でやってきてがたがた言ってる感じで、彼らにしたら迷惑ですよ。何て言ったらいいですかね、その彼らにとっての日常が私の日常とは違っておもしろいというか、私の中に私の知らない世界を開いてもらっている感じがしておもしろいというか……仕事は、ほんとおもしろいからやらせてもらっている

というだけだね。

「壁があると燃えてしまうので、私が（笑）」

齋藤 今までの出会いの中で、心に残るエピソードとか……印象に残っているエピソードは何かありますか。

越野 心に残るエピソードっていうのも思い浮かぶのは、湖南地域の四市の身障の相談支援事業をやった時に、ALSの女性がいて。けっこうALSの進行が早くって、制度が追いつかないというか、例えば、車椅子を交付されても、またすぐストレッチャータイプじゃないと無理になってとか、で、呼吸機能が悪くなって、呼吸器を導入せなあかんくなってとか、意思伝達装置をどうにかしなきゃいけないってみたいなんで、ばたばたばたばたいろんな準備をせなあかん方がいらして。その方は、入院とか施設とかじゃなくて自宅で生活したいという希望をしっかりと持ってらした方だったので、ヘルパーが吸引できるよ

に、仕組みを整えたんですね。それが一番私は心に残るというか、印象に残っていることで。結局亡くなられたんですけど……でも、亡くなられた後に、その娘さんとかご主人が、ばたばたばたばたいろんなヘルパーが入れ替わり立ち代わり入って来るのは、大変やったんだけど楽しかったねっていうふうに言ってくれたっていうのが……一番なんか、イクラのパジャマ的な、「これだー」みたいな（笑）、それはありましたね。ヘルパーの吸引をやったのも、別に私が何か吸引とか医療ケアとかにすごく興味があるわけじゃなくなって（笑）、その人がただ自宅で暮らしたいって言った時に、立ちはだかる壁がいっぱいあってね。違法だけどやむをえず同意書でやるみたいな時代だったので、保健所とか大きな医療機関とか、のきなみ反対で、ヘルパーにそんなことやらせるのは危ない、と。今は、研修も国でちゃんと整って、法律も変わったんですけど、その時代は、医療職と家族以外の者が吸引をするなんて絶対あかんって。だから、当事者の人に何かあっても責任は追及しませ

①びわこ学園……社会福祉法人びわこ学園。糸賀一雄氏によって創設されました。昭和二八年に、滋賀県立近江学園の中で、特に医療的ケアを必要とする療育グループ（杉の子組）が編成されたことが始まり。

②やまびこ総合支援センター……大津市立やまびこ総合支援センター。

③イクラのパジャマ……下田賢宗氏による作品。白いスウェットの上下に、油性ペン、アクリル絵の具、縫いによってびっしりとイクラが描かれています。全国の展覧会

で展示され、多くの人を魅了している作品の一つです。

④アメニティー・フォーラム……障害がハンディにならない社会の実現を目指し、毎年滋賀県大津市にある大津プリンスホテルにて開催。福祉領域に限らず、医療、教育、行政等あらゆる領域の関係者が全国から集まります。平成二七年度で二〇回を迎えました。



んみたいなの、念書みたいのを書かせてね。そんな時代だったですね。看護師さんが二四時間看れるかってそうじゃないので、ヘルパーさんがその方の吸引をできるように、ヘルパーさんに吸引の研修を組んでもらったり、地域の診療所に協力してもらったりとかしてやったんですよね。でもそれは別に、何かをやってやろうと思ったというよりも、壁があると燃えてしまうので、私が（笑）……なので、すごい腹立って、医療とかのところに壁があったので、もうやってやろうって。

齋藤 壊したれ、と。

越野 そうそうそう。かなりご家族にもそのご本人さんにもいろんな面で協力してもらって実現して……なんか大変だったけれども、その時に一緒にやったよねとか、いろんな選択自体はやむをえずした選択だったけれども、それを良い選択だと思えるように、こういうふうにくちやくちやくといういろいろやったよねみたいなことを、後からそのご本人さんやご家族と振り返るのは、長く続けていると良いなと思うことはありますね。あと、呼吸器付けて家で暮らすのを諦めていた他の人たちが、その方とここでできた方法で私もってという患者さんが何人か出てきたんですね。

齋藤 いい話……。

越野 それはすごく嬉しかったですよ。それはどっちかっていうと、患者さんたちは直接は知らないけれども、その方とところでこういうふうにやったっていうのを発表したりとか、報告したりとかしていたら、ケアマネさんとかからね、自分の関わっている何々さんもそういうふうにできるかも知れないからどういうふうにやったか教えて下さいとかって電話がかかってきたりすると、心の中でガッツポーズみたいなの、そういうのはありますね。

齋藤 でも、当時は、周りのおおやけ系は反対していたんですよ？

越野 おおやけ系が反対するとね、燃えますよね（笑）。その時は、医療ケアの制度が何もなかったから燃えていたんですけれど。

齋藤 今、燃えていること、ありますか。

越野 今、燃えているのは性犯罪。そのちょっと前に燃えていたのは、いわゆる司法の壁を崩すことやったんですけれど。

齋藤 定着（⑤）ケースってことですか。

越野 そうそうそう。でも、それは定着が頑張っていたりすることもあって、検察庁とか保護観察所とかが今、こっち向いているじゃないですか。それでなんか今、もう私がすごくがんばらなくてもよいかな……と。それまでは、弁護士とか警察官とかと戦うのが大好きだったんですけど、今

はそれよりも、触法と障害者とプラス性犯っていうこの三重のステイグマを負わされている性犯罪の人たちへのアプローチですね。

齋藤 性犯罪の加害者ということですか。

越野 そう。知的障害のある加害者の人のプログラムって何もないんですよ。それを開発することに燃えてる。

齋藤 道なきところに道をつくりたいタイプ（笑）。

越野 燃えるんですね（笑）。六、七年ぐらい前とかは、今ほどに注目が集まってなかった時でしたけど、逮捕されたっていう電話が入ってきた時にドキッつまみたいな感じやって。それで、これはなんとか自分の困りごとを解決したかったっていうのと、なんかしなあかんと思って、弁護士さんとかと勉強会を始めて。ハンドブック（⑥）を作ってみたりとかして、司法の人たちに知的障害の人のことをわかってもらったりとか、冤罪にならないようにとか……いわゆる人口支援みたいなのをするのに燃えていたんですよ。なんかそれも燃えていろいろやってたら道がいろいろとできてきたので、残されるは性犯かなと思って。

## 大切にしていること

齋藤 越野さんが、ふだん支援をする際に大切にしていることはどういったことですか。

越野 大切にしていることは何か、はね……私自身の困りごととか私自身が出来ないことをちゃんと知っておいて、SOSを出すっていうことを心がけていますね。大津の間と、弱さの情報公開って呼んでいるんですけど、例えば、二時間の会議でも、最初の一時間は近況報告なんですよ。仕事の話じゃなくて、自分たちのプライベート近況報告、「家で奥さんにこんなこと言われて、こうやった」とか、「うちの子どもはこうや」とか、趣味の話とか、援助者のセルフヘルプグループみたいなね。それは私たちが初めてやったことではなくって、それこそダルクとかアルコール依存の人たちとかの言いつばなし聞きつばなしっていうのに学んで。仕事では偉そうに見えたり、なんかすごいことしているような人たちでも、弱いところいっぱいあるよな、みたいなのを分かち合った上でやるっていうのは、いつも

⑤ 定着……地域生活定着支援センター。罪を犯した高齢者・障害のある人への支援を行なう専門的機関。滋賀県では、当法人が県の委託事業として運営しています。

⑥ ハンドブック……知的障がいのある人が地域で安心して暮らすために―逮捕の連絡を受けてから起訴まで―。平成二二年十一月に「大津高齢者・障がいの者の権利擁

護研究会」により作成されたもので、知的障がいのある人の家族や福祉関係職員等が、本人が逮捕されたという連絡を受けた後、どのように支援していくことができるかがまとめられています。

やっつけて。そういうふうな関係が出来てると、困った時にすぐSOSが出せる。私、利用者さんのことで困っている時は、この人のこういうことについて私が困っているから、私の相談にのってって電話するんですけど（笑）、そういうふうに関わりと自分の出来ないことを知って、どこにSOSを出すかっていうようなことを、いつも心がけて大切にしています。

あと、その人のことをいくら思ったって私の人生じゃないので、その人が生きてく人生を奪ったらあかんあかんって言うのはいつも思っていて。例えば、こんなお母さんだからとか、こんな家だからとか、こんな病気だからとかみたいに問題探しをするんじゃないかって、その問題をどういうふうに扱うかっていうこと……起こっている事象はね、もうそれは変えられないので、それを扱う方法を一緒に考えることに力を注ぐようにしています。いろんな歴史の中でそのうちが抱えて来たものを一緒にひもといで、それぞれその場その場ではそれがベストだと思って選択してきたことだと思うので、その選択に何かを言うわけじゃなくって、その選択が良かったねって思えるような努力を一緒にするっていうことを心がけているかなと思う……。

あと、もう一個。上手くいっている時に注目する。障害を持っていて人が生まれた、と……で、上手いかなくなっ

たから相談が入るけれども、上手くいっている時の方が長いわけで、その困りごとだけに注目すると症状にわーっと入りこんじゃうので。性犯罪とかもそうなんですけどね、二四時間性犯罪しているわけじゃないので、性犯罪してない二三日、何時間はどうやって過ごしているのかとか、上手くいっている時の分析も、いつも大事にしていますね。

#### 自覚者が責任者、熱願冷諦

越野 利用者さんの事例検討をしつつ、利用者さんの話をネタにして、「僕が困ってます」みたいなことを言う人、いるじゃないですか。ただ自分達がしゃべりたいだけやんかみたいなの……ああいうのがすごい苦手で。それはそれでちゃんとやったらいいと思うんですけども、なんかこう、問題解決の仕組みを作ったりしたいんですけどね。それがね、「自覚者が責任者」なんですよ、ほんとに……。

齋藤 気づける立場にいたっていうことでもんね。

越野 そうそう。だから、気づいたらやったらええやん、みたいな話で。ここにきて教わったのは、その、「自覚者が責任者」と、あと、岡崎先生(7)の言葉ですけど、「熱願冷諦」というのを教わって。私って思い込みが激しいので、ついつい思い入れてしまうことが多いんです。わーっ

ていう感じなんで、落ち着きないんだけど、落ち着きがないからいろんなことが目に入るので、自覚しちゃうんですよ。自覚したらやらなあかんと思ってやっちゃうんですよ。やっちゃうとできちゃったんですよ（笑）。変な成功体験につながっちゃって、私の中で。

齋藤 行動が強化された感じですか。

越野 そうなんです。迷惑をたくさんかけていると思うんですけれど……。でも、この二つはもう私の中に擦り込まれていることで。気づいてしまったらそれをする誰かにならなあかん、と。で、その誰かになるっていうところが、びわこ学園の先輩方から教わってきたことなので、気づいてまたまた燃えてしまったからやっちゃった。ただそれだけなんですけどね。

### どこにいても誰がやってもできる仕組み

齋藤 そろそろまとめる時間ですかね。これからの、僕らより下の世代に向けたメッセージみたいなのことかというと……。

越野 いや、その質問は難しいな……。

齋藤 そうですよ。でも、越野さんの話からはいろいろと道なきところに道をつくるというか……

越野 なんかね、越野だからできるとか、名人芸だとか、大津だからできるとか、特別なものにはしたくないなあと思っているのと……。私の解釈では、糸賀先生だからできたとかいうことじゃなくて……。最初に気づいた者がちゃんとやるっていうことなんだけれども、ちゃんとやる、はその場だけ良くなればいいということではなくって、後に続く人とか、地域とか、どこにいても誰がやってもできるみたいなところまで、仕組みを作らないと……。大津のやまびこの越野のそこ行けばなんとかなるとかいう、そういうレベルの話じゃないと思っっている。

齋藤 自覚した者が誰であっても責任者になれる仕組みを作るっていうイメージ（笑）……。責任者っていうか、これをこう変えたいなと思った時に、例えば越野さんはね、壁にぶつかるって燃えるタイプだから乗り越えてきたとして、壁にぶつかるってちよつと萎縮しちゃうタイプでも乗り越えられるような仕組みにするとか（笑）……。

越野 だから、壁を作らないっていうことですよ、逆にね。壁を最初に取り壊してしまっただけ、誰でもアクセスでき



るようにしておく。ヘルパーの吸引なんかは、別に私が全部の壁を壊したわけではないけれども、一個壁を最初に壊したら、後からの人が歩いてこられたし、逮捕されたらどうしようっと思っていた人たちも、一回ね、司法の方でこうやってやってますってアクセスしとけば、こういう形でできるのねということがわかるので。

齋藤 自覚した人が最初に壁を超える、すると誰もが後に続いて展開していけるといことですよ。

越野 そんな、皆ががんばらなくてもね。がんばらなくても生きていける方が楽ですからね（笑）。要は、障害を理由にした施策、障害を個人のせいとする・個人にアプローチする施策ではなくって、環境との相互作用の中で、今、たまたま困っている状態というのを理由にしたユニバーサルな施策設計になればいいなと思っています。

齋藤 今日は、越野さんのお生まれから現在取り組まれていくことに至るまでのお話をうかがう中で、越野さんのお人柄にもふれることができたひとときだったと思います。貴重なお話、ありがとうございます。

越野 いえいえ、こちらこそありがとうございます。